

《原著》

アタッチメントに関わる母親の感性概念の検討

近藤清美 井上 望 中野 茂 草薙恵美子*

Reconsideration of maternal sensitivity construct to attachment security

Kiyomi KONDO Nozomi INOUE Shigeru NAKANO Emiko KUSANAGI*

Abstract: This study reconsidered the validity of the maternal sensitivity construct by multi-level assessments of mothers' behaviors during mother-infant play interactions with toys in 40 mother-infant pairs at 6 months of age. To score maternal sensitivity, Ainsworth's maternal sensitivity scale, and three types of behavioral rating were introduced.; 1)the maternal sensitivity scales to infant positive affect, negative affect and intention; 2)micro-analysis of behaviors in mothers, infants and mother-infant interactions; 3)content analysis of maternal speech. The results showed that Ainsworth's maternal sensitivity was highly correlated to sensitivity to infant's intention and frequency of maternal specific speech in which mothers spoke for infants with reading infants' mind but it was not related to any individual behaviors both in mothers and infants. These results indicated that maternal ability to take infant's point of view is the most important to enhance infant attachment security.

Key words: 感性(sensitivity), アタッチメント (attachment), 母子遊び場面(mother-infant play interaction)

はじめに

アタッチメントとは特定の対象に対する情緒的絆であり「愛着」と訳されている。しかし、単に情緒的絆を指す概念ではなく、弱い者が力のある者、つまり、アタッチメント対象に世話や保護を求める機能を持ち、アタッチメント対象を安全基地として利用し、その存在によって安心感を得る関係性である。Bowlby(1969)は乳児から親への情緒的絆に対してアタッチメントと名付けたが、HazanとShaver(1987)が示すように、恋人や配偶者、親友といった関係として、人は大人になっても困ったときや不安なときに頼れるものに保護や世話を求めるものであり、生涯にわたって何らかの対象にアタッチメントを持つと考えられる。

Bowlby(1951)は、施設収容児の研究から母子間のアタッチメントの重要性を明らかにしたが、アタッチメント関係の個人差に注目したのはその共同研究者であるAinsworthであった。Ainsworthは、臨床心理学分野で博士号を取得した後イギリスに渡り、Bowlbyの元で乳幼児の行動観察の手法を学んだ。その後、夫の仕事に従って、アフリカのウガンダに渡り、家庭場面での乳児と母親の行動を観察した。彼女のウガンダでの研究(1967)では、アタッチメント関係のあり方として1)安定したアタッチメント、2)不安定なアタッチメント、3)アタッチメントがない、の3タイプに区分された。この研究では、アタッチメントタイプに関わる要因として、母親の乳児へ関わり時間の総量や母親が乳児に興味をもち、具体的で詳細な情報を提供できること、乳児の要求に従って母乳を与えることが明かとなった。その一方で、スキンシップや

* 國學院短期大学

情愛を乳児に示すこととは関連しなかった。彼女がアタッチメントの個人差に興味を持ったのは、臨床心理学的視点によるものと言えるだろう。

その後、Ainsworthはアメリカのバルティモアに移り、23組の母子によってアフリカでの研究の追試を行った (Ainsworth, Blehar, Waters & Wall, 1978)。しかし、乳児期から人の出入りが多いアメリカの文化的環境において、見知らない人が家庭訪問をすることではアタッチメントの質的な差異を明らかにすることができなかった。そこで考案されたのがストレンジシチュエーション法である (Ainsworth & Witting, 1969)。この方法は、10ヶ月から20ヶ月の子どもに適用可能であり、子どもに適度なストレスを与えてアタッチメントシステムを活性化させ、その個人差を明らかにするものであり、見知らない場面において、見知らない人との出会いと、2回の母子分離再会を含む8場面からなる約20分の実験的観察法である。この手続きによって、1) アタッチメント対象を安全基地としてあてにして利用し、母子再会に際して母親を歓迎する「安定群=Bタイプ」、2) アタッチメント対象をあてにせず、ストレス下でもアタッチメントシステムを活性化しない方略を用いて、母子再会に際しても母親を回避する「回避群=Aタイプ」、3) アタッチメント対象の利用可能性に自信がなく、アタッチメントシステムを過活性する方略を用いて、母子再会に際して母親に接触要求と共に怒りを示す「アンビバレント群=Cタイプ」の三つのアタッチメントパターンが見いだされた。

Ainsworthは、生後12ヶ月になって行われたストレンジシチュエーションの前に、生後直後よりほぼ毎週、家庭訪問を行い、その行動観察からアタッチメントパターンの差異を生じる要因を分析した。その結果、生後初期より安定群と不安定群（回避群・アンビバレント群）では母親の養育行動に違いが見られ、安定群では、乳児の泣きに母親はすぐに適切に反応し、身体接触場面において優しく注意深く、情愛的であった。しかし、個々の行動においての

違いは一貫しておらず、行動評定を用いることで母親行動におけるアタッチメントパターンの違いは明瞭に示された。そこで、Ainsworthは、1) 乳児の信号行動への敏感性—鈍感性 (sensitivity-insensitivity)、2) 乳児の要求への受容—拒否 (acceptance-rejection)、3) 乳児の行動への協調—干渉 (cooperation-interference)、4) 乳児にとっての近づきやすさ—無視 (accessibility-ignorance) の4次元を尺度化し、これらの尺度が生後10ヶ月から12ヶ月の家庭訪問で評定され、それがアタッチメントパターンと強く関連することを明らかにした (Ainsworth et al., 1978)。なかでも乳児の信号への敏感性尺度は、1) 乳児の信号を感知する、2) 適切に解釈する、3) 適切な行動を返す、4) 即時に反応するの四つの側面を評定するものであり、これら4次元は互いに強い相関を示すことから、後の研究では、この敏感性尺度が主として用いられるようになった。

Ainsworthらの研究 (Ainsworth et al., 1978) 以来、敏感性の概念を明確にするために、母子の行動の同期性から明らかにしたり (Isabella, Belsky & van Eye, 1989)、行動の微視的分析から明らかにしようとする試み (Vondra, Shew & Kevenides, 1995) がなされてきたが成功していない。また、敏感性が母親への質問紙調査で「養育態度」として測定された場合には、アタッチメントとの関連は見いだされなかった (Rosen & Rothbaum, 1993)。

これまでの研究では、Ainsworthのオリジナルの敏感性尺度を用いる限り、対象となる文化、社会階層を問わず敏感性とアタッチメントの関連が示されてきた (例えば、Ahnert, Meischner & Schmidt, 2000; Posada, Garbonell, Alzate & Plata, 2004)。しかし、わが国の研究ではストレンジシチュエーションで測定されたアタッチメントの安定性と母親の敏感性の関連は見いだされなかった (Nakagawa, Lamb & Miyake, 1992)。この中川の研究結果は、アタッチメントの安定性と母親の敏感性の関連に対する反証と言うより、わが

国でのストレンジシチュエーション法が、わが国の育児状況に照らしての生態学的妥当性がないことを示すものと考えることができる。しかし、その一方で、Rothbaum, Weisz, Pott, Miyake & Morelli(2000)が指摘するように、わが国では、乳児が信号を発する前に母親が乳児の行動を先取りして行動を起こすために「乳児の信号に対する適切な反応」としての敏感性の概念はアタッチメントに対して重要でない可能性も残されている。

ところで、Kagan(1984)が、アタッチメントの安定性を規定する要因として気質の重要性を唱えだしたことで、アタッチメントの規定要因を巡る論争がわき起こった。気質尺度が何を測定しているかの問題は別として、この論争は、乳児の気質が母親の養育行動に関係することは否定できないとしても、それがアタッチメントの安定性に直接、関係するものではなく、せいぜい不安定なアタッチメントのパターンを規定する可能性があると言うことで決着を見た (Goldsmith & Alansky, 1987, van den Boom, 1994; Seifer, Schiller, Sameroff, Resnick & Riordan, 1996; Vaughn & Bost, 1999)。しかし、この論争の過程で母親の敏感性とアタッチメントの安定性の関連に関するメタ分析が行われ (Goldsmith & Akansky, 1987), 敏感性のアタッチメントの安定性への影響はそれほど大きくないことも示された。また、De Wolff & van Ijzendoorn(1997) は、それまで行われてきた研究成果をもとにメタ分析を行い、母親の養育行動と母子関係、あるいはアタッチメントの間には、.17のエフェクトサイズしかないことを明らかにした。また、これを母親の敏感性に限って検討しても、.22にしかならなかった。しかしながら、母親の生活状況の変化によって子どものアタッチメントパターンに変化が生じること (Pianta, Sroufe & Egeland, 1989) や母親の養育行動に介入することで子どものアタッチメントが安定する (Lieberman, Weston & Pawell, 1991) ことから、母親の養育行動が子どものアタッチメントパターンの形成に大きく影響していることは否めない。母親の敏感性のエフェクトサイズが大

きくない理由のひとつとして、母親の敏感性として測定されているものが、各研究者によって異なっていたり、敏感性の概念が曖昧であったりすることが考えられる。

さらに、近年、母親のアタッチメント表象と敏感性、子どものアタッチメントの関係が注目されている。そうした研究では、母親のアタッチメント表象と子どものアタッチメントパターンの一致率は総じて高く (van Ijzendoorn, 1995), それは母親が子どもの行動から影響を受けない母親の妊娠中のアタッチメント表象との関係でも同じであった (Fonagy, Steel & Steel, 1991)。しかしながら、アタッチメント表象と養育行動の関係は、van Ijzendoorn(1995)のメタ分析で $r=.34$ でありそれほど高いものではなかった。そこで、何が母親のアタッチメント表象と子どものアタッチメントパターンの間をつないでいるのかが問題となる。アタッチメント理論によると、それが母親の乳児の信号への敏感性とされているが、その敏感性が何を指すのかが問題である。Pederson, Gleason, Moran & Bento(1998)は、母親のアタッチメント表象と敏感性、子どものアタッチメントの関係を研究して、子どもの心理的過程を正確に理解する能力がそれらの変数の間をつなぐものと指摘している。

この指摘に関連して、Meins(1997)は、アタッチメントの安定性に関わる要因としてMind-mindednessという概念を提唱し、親が子どもにも心的世界があるとして子どもの内面を推測したり代弁して、子どもの「心を気にかける」かどうかを問題としている。彼女の一連の研究からは、子どもについて語る際に、子どもが何を考えているのかどのように感じているか、子どもの内面世界を気にかける報告することが多い母親ほど、その子どもは安定したアタッチメントを持つことが明らかされている。

さらに、そもそもAinsworthの敏感性尺度の定義に、「子どもの視点から物事をみる」ということが含まれていることから、親の子どもの内的世界への洞察を取りあげ、子どもの内的世界に

対する洞察のパターンと子どものアタッチメントパターンが対応することを示した研究もある (Oppenheim & Koren-Karie, 2002; Koren-Karie, Oppenheim, Dilve, Sher, & Etzion-Carasso, 2002). 具体的には, これらの研究では, 子どもが映っているビデオを親に視聴させ, 親がどの程度, 子どもが考えたり感じたりしていることに思いをはせ, 場面によって子どもの反応が変化すれば, それに応じて親が子どもに対する新たな見方を報告するかどうかを測定するもので, 子どもの視点から物事を見る能力が評価されている. こうした研究は, Ainsworthのオリジナルな敏感性の定義に立ち返って, 子どもの内面世界を母親がいかに感知するかが安定したアタッチメントの形成に重要であると指摘するもので, 敏感性の概念を捉え直す重要な視点を示唆するものと言える.

このように, ClaussenとCrittenden(2000)も指摘しているが, 子どものアタッチメントの安定性に関わる母親の敏感性の再定義が求められている状況にある. 彼らは以下の6点を問題としている. 1) 敏感性が子どもの信号に対する解釈と反応性を含むものであるが, 両者は区別する必要はないのか, 2) 敏感性は個人特性か, 関係性か, 3) 敏感性は子どもの信号の解釈と反応性に関するスキルか, 暖かさや情愛なのか, 4) 親は様々な役割を持つが, 世話に関する文脈以外での敏感性はアタッチメントと関連するのか, 5) 文脈によって, 敏感性に関する行動には変化があるのではないか, 6) 子どもの発達の必要性 (子どものためになること) に対する敏感性なのか, 子どもの要求 (望みさえすればかなえる) に対する敏感性なのか.

アタッチメントに関わる母親の敏感性の概念を明らかにすることは, 一方では, 母親のアタッチメント表象と子どものアタッチメントパターンの間にある「世代間連鎖のギャップ (van Ijzendoorn, 1995)」を埋める発達心理学上の意義があるが, 他方では, 親子関係に対する臨床的介入で何に焦点を当てるかを明らかにする臨床心理学上の意義もある. 本研究では, こうした一連

の研究の流れを受けて敏感性の概念の再検討を行い, 1) 母親の子どもの信号に対する敏感性は母親の個人特性なのか, 2) 敏感性は子どものどのような信号に対する敏感性であるのか. 危機的場面に対するものか, 危機ではない, むしろ, 楽しい場面の敏感性とかかわるのか, 3) 子どもの視点に立って, 子どもの内面世界に思いをはせることが敏感性と関連するのか, の3点について明らかにすることをめざす.

方 法

対象者; 対象者は妊娠期からの縦断的研究である札幌交差文脈研究に参加している母子40組である. 乳児はすべて第1子であり, 男児19名, 女児21名で, 全員が満期産, 2名がわずかに低体重であったが, それ以外に周産期に特に異常はなく, 発育過程にも問題はなかった. 母親の平均年齢は30.9歳 (SD 4.7), 平均教育年数は14.2年 (SD 1.7), 26名 (65%) は専業主婦であった. 父親の平均年齢は32.1歳 (SD 5.0), 平均教育年数は14.7年 (SD 2.2) で, 29名 (73%) が会社員であった.

手続き; 母親の乳児への敏感性は, 家庭訪問によって乳児が生後6ヶ月になったときに測定された. 家庭訪問では, 5分間のウォームアップの自由遊びの後, 持参した特定のおもちゃを用いて10分間, 母子で自由に遊ぶように教示がなされ, その場面がビデオで撮影された. おもちゃは, ガラガラや起きあがりこぼし, 布絵本と言った年齢にふさわしいものを用意した.

敏感性の評定; 撮影された10分間の遊び場面は, 母親の乳児への敏感性について三通りに分析された. 一つめは, 従来行われた方法に従い, Ainsworth et al. (1978)の敏感性の尺度をもちいて行われた. これは行動評定法で, 詳細なマニュアルにしたがって, 9件法で評定するものである.

二つめには, 母親の敏感性を, 1) 笑いや微笑み, 快の音声などの肯定的な情動に対するもの, 2) 泣きやぐずりなど否定的な情動に対するもの, 3) 玩具を求めたり拒否したりといった乳児の意図に

対するもの、の三つに分けて分析するもので、肯定的情動や否定的情動、意図が示された場面を事象見本法で取り出し、新たに作成されたマニュアルにしたがって5件法で評定された。

三つめは行動の微視分析によるもので、乳児と母親の行動をそれぞれ行為と視線、発声に分け、物に手を伸ばす／つかむ・なめる（以上物への関わり）、泣く／ぐずる、笑う、発声（以上乳児）、物を提示する、話しかける（以上母親）のカテゴリーで10分間の生起回数が算出された。また、母子の関わりの継続時間を測定し、母子が同じ物を見ている場合（興味一致）、母子が異なる物を見ている場合（興味不一致）に分けて分析された。これらの行動分析には、Noldus社製The Observer version 5が用いられた。

さらに、母親の発話について全て書き出し、乳児の内面を読みとっているかどうかで、代弁（あたかも乳児が発話しているかのように母親が乳児になりきって叙述をしたり気持ちを述べたりする）、内面・状態言及（乳児の気持ちや状態を読みとり表現する）、遊び（遊びに伴う発話）、叙述、指示、禁止・叱責、賞賛に関わる発話として頻度が算出された。

これらの感性に関する評定は、種類毎に別々の評定者によって行われた。

関連する尺度； 母親の感性に関連するとされているアタッチメントの評定は、乳児が14ヶ月から15ヶ月の間に、約2時間の家庭訪問に行い、アタッチメントQ分類法（Waters&Deane, 1985）によって評定された。評定は感性尺度の結果を知らない2名によってなされた。本研究では14ヶ月を迎えた23名から評定結果が得られた。

母親の感性が母子双方の気質と関わるかど

うかを検証するために、両者の気質を質問紙によって調べた。質問紙は母親に郵送され、母親が記入して返送した。母親の気質は、成人気質質問紙短縮版(Adult Temperament Questionnaire; Rothbart, Ahadi & Evans, 2000)によって、出産前2ヶ月以内と出産後1ヶ月の時点で調べられた。両者には強い相関が見られたため、本研究では2時点の結果を平均した。乳児の気質は、わが国でもっともよく使われている乳児気質質問紙（Infant Behavior Questionnaire-Revised; 中川・鋤柄, 2005）によって、生後3ヶ月時に調べられた。

結 果

1, Ainsworthの感性尺度の検討

感性尺度の平均値は5.08で標準偏差は2.06であった。この尺度とアタッチメントQ分類法で測定されたアタッチメントの安定性得点との間には、スピアマンの順位相関係数で、 $r=.67$ の高い相関があり、これまでのアタッチメント研究(van Ijzendoorn, Vereijken, Bakermans-Kranenburg & Riksen-Walraven, 2004)と一致する結果であった。

2, 乳児の情動表出・意図に対する感性と感性尺度との関係

Ainsworthの感性尺度が、感性のどのような側面を測定するのかを検討するために、1) 肯定的な情動表出に対するもの、2) 否定的な情動表出に対するもの、3) 意図に対するものの三つに分けて感性を検討した（Table 1）。その結果、乳児の信号のどの側面に対する感性もAinsworthの感性尺度と有意な相関が見られたが、とりわけ、意図に対する感性との相関がき

Table 1 乳児の情動表出・意図への感性と感性尺度との関係

| | 平均値得点(標準偏差) | 感性尺度との順位相関係数 (N=39) |
|-------------|-------------|---------------------|
| 肯定的情動表出への感性 | 3.59 (1.21) | .549** |
| 否定的情動表出への感性 | 2.77 (1.27) | .773** |
| 意図的行動への感性 | 2.85 (1.35) | .901** |

** $p < 0.01$

わめて高かった。また、肯定的情動に対するものより否定的情動に対する方が強い相関があった。

3, 母と乳児の行動の微視的分析と感性尺度との関係

母子それぞれの10分間の自由遊び場面での行動と感性尺度との関連を検討した (Table 2)。母親の行動では、乳児への「物の提示」と「話しかけ」を取りあげたが、「物の提示」で感性尺度と有意な相関が見られた。つまり、乳児の信号へ敏感にかかわる母親ほど、乳児におもちゃを提示して遊びを誘いかけることをさほどしなかったことになる。乳児の行動では、乳児の「物との関わり」や「笑い」、「泣き・ぐずり」、「発声」が取りあげられたが、いずれとも感性尺度との相関は低いものであった。乳児の行動は母親の感性とかかわるものではなかった。

母親と乳児の個体行動と感性の関係を検討したため、念のため、母子それぞれの特性である気質と感性尺度の関係を検討した (Table 3)。その結果、母親の気質の「努力による制御」が感性尺度と有意な負の相関があったが、それ以外には関連が見られなかった。

一方、母子の行動を込みにした行動分析では、母子が別々のものに興味を示している持続時間と感性尺度には有意な負の相関が見られ、母親の感性が高ければ、母子が別々のものに興味を示していることは少ないことがわかった (Table 2)。

4, 母親の発話内容と感性尺度との関係

母親の発話内容で、「代弁」だけが感性尺度と高い相関を示した (Table 4)。「叙述」では、「おさるさんだよ」や「これはいい音するね」と話者が母親であり、乳児に説明するように話していたが、「代弁」では、「わあ、すごい」や「いい音だ」といった文脈から考えて話者が乳児であるかのように母親が乳児になりきって話し、声のトーンも母親が叙述をするときとは違っていた。一方、「内面・状態言及」も、「これが気に入ったの」「楽しそうね」といった乳児の気持ちや状態を母親が説明するものであるが話者は母親であった。この頻度では正の相関が見られたが有意ではなかった。また、「叙述」や「指示」は感性尺度と弱いながらも負の相関が見られ、「食べちゃうぞ、がぶがぶ」や「～ちゃん、はいこれは」といった遊び

Table 2 母親と乳児の行動生起頻度・持続時間と感性尺度との関係

| 10分間の行動 (標準偏差) 感性尺度との順位相関係数 (N=40) | | |
|------------------------------------|---------------|--------|
| (母親の行動 ; 頻度) | | |
| 物の提示 | 52.22 (16.91) | -.324* |
| 話しかけ | 69.55 (19.78) | -.168 |
| (乳児の行動 ; 頻度) | | |
| 物への関わり | 44.03 (14.40) | .046 |
| 笑い | 1.30 (2.91) | .369* |
| 泣き・ぐずり | 3.90 (7.26) | -.170 |
| 発声 | 6.60 (9.86) | .158 |
| (母子の行動 ; 秒) | | |
| 興味一致 | 335 (0.09) | .170 |
| 興味不一致 | 143 (0.08) | -.320* |

* $p < 0.05$

Table 3 母と乳児の気質と敏感性尺度との関係

| | 平均值得点 (標準偏差) | 敏感性尺度との順位相関係数 (N=40) |
|---------|--------------|----------------------|
| (母親の気質) | | |
| 否定的情動性 | 4.21 (0.07) | .298 |
| 努力による制御 | 4.70 (0.71) | -.399* |
| 高潮性 | 4.57 (0.64) | -.119 |
| 敏感性 | 4.57 (0.68) | .239 |
| (乳児の気質) | | |
| 否定的情動性 | 3.44 (0.61) | .179 |
| 高潮性 | 2.98 (0.42) | .091 |
| 調整 | 1.67 (0.70) | .140 |

* $p < 0.05$

Table 4 母親の発話内容と敏感性尺度の関係

| | 総発話数に対する平均頻度 (%) | 敏感性尺度との順位相関係数 (N=40) |
|---------|------------------|----------------------|
| 代弁 | 8.98 (8.55) | .663** |
| 内面・状態言及 | 15.25 (9.08) | .233 |
| 遊び | 29.85 (1.17) | .006 |
| 叙述 | 24.86 (9.81) | -.231 |
| 質問 | 12.43 (8.25) | .040 |
| 指示 | 5.68 (5.06) | -.263 |
| 禁止・叱責 | 2.98 (5.62) | -.119 |
| 賞賛 | 8.58 (1.96) | .171 |

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

に伴う発話と敏感性尺度との間には相関が全く見られなかった。

考 察

本研究で測定された敏感性尺度はアタッチメントの安定性と強い相関を見せたことから、従来、アタッチメントの安定性と関連するとされる母親の乳児の信号への敏感性、つまり、Ainsworthの

敏感性尺度を適切に測定していたとすることができる。

その敏感性に対して、乳児の意図的行動に対する敏感性がもっとも強く関連し、乳児の情動に対する反応では、肯定的なものより否定的なものに対して相関が高かった。つまり、Ainsworthの敏感性尺度では、母親が乳児の視点に立って乳児の意図を汲み取ることが最も重要であり、単に、情動的な信号の読み取りや反応だけではないと言

うことを示したことになる。また、情動的信号であっても、主として否定的な情動に対する感性を問題とする尺度であり、笑ったり微笑んだりといった主として遊び場面で生じるような肯定的な情動との相関はほどほどの値で、あまり関連しないと言ってもよい結果であった。アタッチメントはBowlby(1969)が言うように危機的場面での乳児の保護を主な機能とする行動システムであることを考えると、それにもっとも関連する母親の感性が、乳児の危機に際しての否定的な情動への反応にあることは十分に納得の出来る結果である。

次に、母子それぞれの個体行動や気質が感性に関係するかどうかを検討した。その結果、母親の個体行動や気質との関連は若干見られたが、乳児の個体行動や気質が母親の感性に関係することはなかった。母親の行動の「物の提示」と母親の気質の「努力による制御」が、感性尺度と有意な負の相関を示した。本研究での観察場面は、特定のおもちゃが出てきて、母子がおもちゃで遊ぶことが求められる場面であり、観察場面が求める期待に従うと、母親は乳児と遊ぶことが強いられる。その場面で、乳児の反応にかまわず、遊びを誘い、努力してそういう行動の制御ができる気質の母親は、乳児に敏感に関われないと言える。逆に、相手にあわせて柔軟に行動を変えたり、制御をしないで自ら感じるままに乳児に対応したりできることが、感性につながると言えるかもしれない。

一方、乳児の個体行動や気質が母親の感性に関連しなかった。つまり、母親が敏感に関わるかどうかは乳児の特性によるものとは言えないことを示している。乳児の気質がアタッチメントの安定／不安定には関わらない(Vaughn & Bost, 1999) ことが明らかにされているが、アタッチメントの安定性と密接に関係しているとされる母親の感性を左右することもないことが本研究では示された。

感性尺度が母子双方の個体行動と関連がないことが明らかになった一方で、母子双方の行動を込みにした行動である「興味不一致」、つまり、

母子が異なる物に興味を示し行動がバラバラであることは、母親の感性と有意な負の相関を見せた。もっとも、母子が同じ物に興味を示している「興味一致」とは母親の感性と有意な相関を示さなかった。このことは、母親の感性が、必ずしも母親が乳児と同じ物に注意を向けていることに関連するのではなく、母親が乳児の姿勢を変えたりおもちゃを並び替えて乳児の遊びをサポートしたりすることとも関連していたためと考えられ、母子の注意が全くバラバラで異なる物に興味を向けている場合のみが問題となったわけである。母親が乳児の興味に注意を払い、常にそこから離れないで関わるのが、母親の感性の前提にあると考えられる。その点でも、母親の感性は、単に、乳児が発する信号に反応する能力に関連するのではなく、乳児の視点に立って物事を見ているかどうかに関わると言うことができる。

最後に、母親の発話が分析され、「代弁」が感性と高い相関があることがわかった。「代弁」は、母親が乳児に成り代わって、あたかも乳児になりきったかのように発話するもので、その状況での乳児の内面を代弁するものである。これは、表面的には乳児の気持ちや考えを表す言葉を含まず、その点では、「内面・状態言及」と異なるもので、Meins(1997)の言うmind-mindednessとも違うものと言える。「代弁」は、乳児の気持ちや考えを認知的に把握して叙述するというよりもむしろ、母親が乳児の気持ちに「なり込んで」、乳児に成り代わって発話するもので、乳児の内面世界と通底することで初めて可能となると考えられる。その点で、Ainsworthの言う乳児の視点に立って物事をながめることに通じる。

一方、内面・状態言及と感性は、正の相関を示したが有意ではなかった。このことから、単に、乳児の気持ちや状態を読みとることや、乳児の内面的世界に関心を寄せてそれについて発言することは、感性と強く関連しないことを示す。感性で問題なのは、乳児の内面世界に関心を寄せたり、それを客観的に叙述したりすることではなく、乳児になり込み、乳児と一緒に行動することである。

つまり、感性とは、乳児の信号を認知的に読みとる能力を指している訳ではないということになる。

なお、「叙述」や「指示」と言った母親の教示的な役割に関する発話は感性とは弱い負の相関であった。生後6ヶ月の乳児に対して、何かを説明したり教えようとする行動は乳児の行動を無視していることになるのかもしれない。とりわけ、本研究での観察場面がおもちゃでの遊びを母子に要求するものであるだけに、その要求に応えることに集中することが、乳児の行動を無視することにつながると言えるだろう。また、遊びに関する発話は、感性と全く関係がなかった。遊びかけをよくするかどうかは感性とは関係がないと言える。中野(2006)は、母親の乳児への役割として、世話と遊び、教示の3つに分け、それぞれ、コンパニオンシップやアタッチメントへの関わりが異なることを明らかにした。本研究の結果は、遊びや、叙述／指示と言った教示に関する発話は、母親の感性と関連がないことを示すもので、母親の感性がアタッチメントにのみ関連するもので、コンパニオンシップに関連する遊びや認知発達に通じる教示とは関わらないことを示すものと言えるだろう。

以上の結果をまとめると、本研究の結果は、感性が子どもの視点に立って子どもの内面世界に思いをはせる能力と関連することを、意図に対する感性と母親の発話の分析から明らかにした。また、弱い結果ではあるが、否定的情動に対して感性の相関が比較的高かったことから、感性は否定的情動という危機的場面に関連するものであることを明らかにした。さらに、感性が個人特性かどうかについては、母親の個体行動や気質のいくつかと関連するところからその可能性が高いと言える。しかし、本研究の行動観察場面では、乳児の行動を全く無視して母親の行動を評定することは不可能であり、母親の行動は常に乳児に規定されていると言える。したがって、感性尺度の評定を初めとして、母子それぞれの行動を分析した場合でも関係性を捉えている可能性は否定で

きない。感性が個人特性か関係性かについては、本研究では十分に明らかにできず、今後の課題である。

ところで、本研究の行動観察場面は、危機がなく、むしろ、おもちゃでの遊びを求められる場面であり、アタッチメントに関する変数を評価するのにふさわしいかどうかは疑問の点もある。さらに、生後6ヶ月は母子の対面遊びからおもちゃを介しての遊びへの移行期であり、乳児はおもちゃがあればそれを探索することに集中して母子で遊ぶことが困難となる時期である。その時期に、あえて母子関係を調べることの意義は明らかではない。今後の研究では、こうした問題・疑問を解決する必要がある。

最後に、そうした限界があることは認めるにしても、本研究では、母親が乳児の視点から物事を見ることが感性に大きく関わり、単に、乳児の情動的な信号を読みとるだけでなく、乳児の意図や気持ちを感じてなり込んで行動することが重要であることが明らかとなった。現在、母子関係調節として、親—乳幼児心理療法 (Stern, 1995) といった親の乳児の表象に対する介入や相互作用ガイダンス (McDonough, 1993) といったアプローチが行われている。また、これらのどの技法も、乳児の信号行動を取りあげ、乳児の内面世界への洞察を促す。本研究が母子関係調節に示唆することは、単に乳児の情動表出などの信号行動に対する認知的な読み取りや解釈を母親に身につけさせるのではなく、乳児の気持ちになり込み、乳児の視点から物事を見て、乳児の気持ちや意図に即した行動ができるようになることが介入の重要点であるということである。そのためには、母親の乳児に対する思いこみや決め付け、乳児の内面の洞察を阻む防衛機制について取りあげ話し合うことが必要となる。また、実際の乳児の行動を見ながら乳児の内面に思いをはせ、母親の気づきを促すことが必要になるであろう。近年、ビデオフィードバックによる母子関係調節が盛んであり (Beebe, 2003; Marvin, Cooper, Hoffman & Powell, 2002)、アプローチは精神分析的なもの

から行動論に基づくものまで様々あるが、いずれも、実際のわが子との相互作用をとりあげ、子どもの思っていること、感じていることに焦点を当てることでは共通する。

子どもに内面世界があり、親子相互作用において子どもの視点に沿って行動することは、対象の主体性を尊重しそれを受容する心理臨床の基本的立場に通じるものである。安定したアタッチメントを形成し、子どもがその関係性を安全基地として世界を探索することに寄与する親の敏感性とは、心理臨床における受容と共感や主体性の尊重に共通する概念と言えるかもしれない。そうであるなら、親子関係に限らず、アタッチメントは、心理的援助における対人関係を考える重要なキーワードとしてもっと注目されてもいいであろう。

本研究は、平成15年度日本学術振興会・科学研究費（基盤研究（c））課題番号16530432：研究代表中野茂）の助成を受けた。本研究の一部は、井上望の平成18年度北海道医療大学大学院心理科学研究科修士論文の研究結果を用いた。本研究に参加協力していただいた赤ちゃんとお母さんに心よりお礼を申し上げます。また、本研究には多くの方がアシスタントして尽力していただきました。心からお礼を申し上げます。

引用文献

- Ahnert, L. Meischner, T., & Schmidt, A. (2000). Maternal sensitivity and attachment in East German and Russian family networks. In P. M. Crittenden, & A. H. Claussen, (Eds.) *The organization of attachment relationship*. Cambridge Univ. Press. 61-74
- Ainsworth, M. D. S. (1967). *Infancy in Uganda: Infant care and the growth of attachment*. Johns Hopkins University Press.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment : A Psychological study of the Strange Situation*. Erlbaum
- Ainsworth, M. D. S. & Witting, B. A. (1969). Attachment and exploratory behaviour of one-year-olds in a Strange Situation. In B. M. Foss (Ed.) *Determinants of infant behaviour* (Vol. 4). Methuen. 113-136
- Beebe, B. (2003). Brief mother-infant treatment using psychoanalytically informed video microanalysis. *Infant Mental Health Journal*, 24, 24-52.
- Bowlby, J. (1951). *Maternal care and the growth of maternal health*. Geneva: World Health Organization.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, Vol. 1, Attachment*. Basic Books (Revised edition, 1982)
- Claussen, A. H., & Crittenden, P. M. (2000). Maternal sensitivity. In P. M. Crittenden, & A. H. Claussen, (Eds.) *The organization of attachment relationship*. Cambridge Univ. Press. 115-122
- De Wolff, M. S., & van Ijzendoorn, M. (1997). Sensitivity and attachment; A meta-analysis on parental antecedents of infant-attachment. *Child Development*, 68, 571-591.
- Fonagy, P., Steel, H., & Steel, M. (1991). Maternal representation of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, 69, 891-905.
- Goldsmith, H. H., & Alansky, J. A. (1987). Maternal and infant temperamental predictors of attachment: A meta-analytic review. *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, 55, 895-816.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Isabella, R. A., Belsky, J., & von Eye, A. (1989). origin of infant-mother attachment: An examination of interactional synchrony during the infant's first year. *Developmental Psychology*, 25, 12-21.
- Kagan, J. (1984). *The nature of child relationship*. New York: Basic book.
- Koren-Karie, N., Oppenheim, D., Dolve, S., Sher, E., & Etzion-Carasso, A. (2002). Mothers'

- insightfulness regarding their infants' internal experience; Relations with maternal sensitivity and infant attachment. *Developmental Psychology*, 38, 534-542.
- Lieberman, A. F. Weston, D., & Pawell, J. H. (1991). Preventive intervention and outcome with anxiety attached dyads. *Child Development*, 62, 199-209.
- Marvin, R. Cooper, G., Hoffman, K., & Powell, B. (2002). The circle of security project: Attachment-based intervention with care-giver-pre-school child dyads. *Attachment and Human development*, 4, 107-124.
- McDonough, K. (1993). Interaction guidance. In C. H. Zeanah(Ed.), *Handbook of infant mental health*. Guilford Press;New York. 414-426.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the development of cognition*. East Sussex: Psychology press.
- 中川敦子・鋤柄増根 2005 乳児の行動の解釈における文化差はIBQ-R日本版にどのように反映されるか 教育心理学研究, 53, 491-503.
- Nakagawa, M. Lamb, M. E., & Miyake, K. (1992). Antecedents and correlates of the strange situation behavior of Japanese infants. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 23, 300-310.
- 中野茂 2006 多面的な親子関係の発達モデルを探るー Attachmentから間主観性的 companionshipー 北海医療大学心理科学部研究紀要 創刊号
- Oppenheim, D., & Koren-Karie, N. (2002). Mother's insightfulness regarding their children's internal worlds: The capacity underlying secure child-mother relationships. *Infant Mental Health Journal*, 23,593-605.
- Pederson, D. R., Gleason, K. E., Moran, G., & Benton, S. (1998). Maternal attachment representations, maternal sensitivity, and infant-mother attachment relationship. *Developmental Psychology*, 34, 925-933.
- Pianta, R., Sroufe, L. A., & Egeland, B.(1989). Continuity and discontinuity in maternal sensitivity at 6, 24, 42 months in a high-risk sample. *Child Development*, 60, 481-487.
- Posada, G., Garbonell, O. A., Alzate, G., & Plata, S. J.(2004). Through Colombian lenses: Ethnographic and conventional analyses of maternal care and their associations with secure base behavior. *Developmental Psychology*, 40, 508-518.
- Rosen, K. S., & Rothbaum, F. (1993). Quality of parental caregiving and security of attachment. *Developmental Psychology*, 29, 358-367.
- Rothbaum, F., Weisz, J., Pott, M., Miyake, K., & Morelli, G. (2000). Attachment and culture: Security in the United states and Japan. *American Psychologist*, 55, 1093-1104.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S., & Evands, D. E. (2000). Temperament and personality: Origins and outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17, 97-114.
- Seifer, R., Schiller, M. Sameroff, A. Resnick, S., & Riordan, K. (1996). Attachment, Maternal sensitivity, and infant temperament during the first year of life. *Developmental Psychology*, 32, 12-25.
- Stern, D. N.(1995). *The motherhood constellation: A unified view of parent-infant psychotherapy*. New York:Basic Book (スターン,D. N. 馬場禮子・青木紀久代訳 親一乳幼児心理療法:母性のコンステレーション 岩崎学術出版)
- van den Boom, D. C. (1994). The influence of temperament and mothering on attachment and exploration: An experimental manipulation of sensitive responsiveness among lower-class mothers with irritable infants. *Child Development*, 65, 1457-1477.
- van Ijzendoorn, M.H. (1995). adult attachment representations, parental responsiveness, and infant attachment: A meta-analysis on the predictive validity of the Adult Attachment Interview. *Psychological Bulletin*, 117, 387-403.

- van Ijzendorrn, M. H., Vereijken, C. M. J. L., Bakermans-Kranenburg, M. J., & Riksen-Wlraven, J. M. A. (2004). Assessing attachment security with the Attachment Q-sort: Meta-analytic evidence for the validity of the observer AQS. *Child Development*, 75, 1183-1213.
- Vaughn, B. E. & Bost, K. K. (1999). Attachment and temperament. In C P. R. Cassidy, J. & Shaver, (Eds.) *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. New York: Guilford Press. 198-225.
- Vondra, J. I., Shaw, D. S., & Kevenides, M. C. (1995). Predictiong infant attachment classification from multiple contemporaneous measures of maternal care. *Infant Behavior and Development*, 18, 415-425.
- Waters, E., & Deanes, K. E. (1985). Defining and assessing individual differences in attachment relationships: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton, & E. Waters. (Eds.), *Growing points in attachment theory and research*. Monographs of the Society for Research in Child Development (Vol.50), 41-65.